

泰時明斷錄 三

~ 13  
3367  
8



18  
3337  
3

北條泰時明浙録第一輯卷之三

東都

松亭金水編次

大正十八年九月  
本大學出版部贈

第五回

的中の察智并將基と辨ど

古語小曰く。君子欲多きまは富貴と慕ひ道法狂て禍と招く。小人欲多き時ハ多く求めて妄り小用ひ家と敗り身と喪はるとや。と小陸奥より數多の黄金と齎し。京幾その他諸国小齎す。のあり。その豪族多かる中。小の源九郎義経小俱して奥。忍秀衡が館へ到り。金商橋次あるもの。そまが魁首と聞えり。子々孫々も其業と嗣て。今も年々黄金を齎し。京幾の間。齎く。この活業と云は橋六あるもの。這回遠路の旅泊と凌ぎて。ゆく。京へ到り。死荷と披き

月行録第一輯卷之三

てそましくお驚きけるお其中の二箇計りや黄金おあつて石瓦城  
 詰てあり。橋六つしつらち駭き抑国許を荷と造る時自ら逸々小點  
 見してその員と合しつるお。斯石瓦と寢ざるを如何なる妖魔の所為か  
 りや。昔づつら小聞おは他が視るが蛙ふるまふと言合めて黄金城埋め  
 其後主する人発まらるお。さる悉く蛙とあり。飛おらば吾ゆめあつて  
 奥と醒しの大い城廣げ我ありくと声ひて追くまごも足早くて残り  
 ろく飛失せしとかの吝ある誠おのひいさまごもは荷披披はる  
 石瓦ふるまふと言しつるお。不測とて半晌斗り只管呆まを明る口と  
 結ぶ心も着ぬまを途方おまごる其折らう。這面俱しつる召仕ごも追々お  
 聚まらて各眉と輝めつら。不測のゆりも世あつて思ひおび視

るお上包の菰筵まご封印も異りるお。黄金の瓦と寢ざる其荷物の  
 宰領ら。まご越度ふる。言解おゆめは。さる人足と奈何ゆめ  
 て辨之る力侍らる。去とて此伏ふるまごさるあつね草と分け地と鑿ち  
 ての詮美せざる宰領が身の明もまごら。何さる仔細らるお。ゆめと各眉  
 と輝め色と青しつるお。計と失ひけり。干時主人橋六は且くまご又は考へ  
 居しつら良あつて諸人と視らる。吾ら荷の主まごも旅中のつら。你達  
 小うち任して進退せざる事。の相違と考之る心當りの一向のまご。你達ハ  
 荷物お附て或ひ馬の着卸し。旅宿その他路々心着る。勉るまご若  
 彼処あつて過けん。此処あつて失けん。細少の心當りのあつて。又はよう  
 考へく如此しを事と計らる。然とて主人が言葉おまごら。おひおせしと

こそあき東海道（とうかいどう）の天龍川（てんりゅうがわ）の馬（うま）の脊（せ）より荷（か）と卸（おろ）し渡（わた）し舟徒（ふねぢ）の折（せり）  
 過（あ）て水中（みづなか）へ二箇（ふたつ）の荷（か）と取落（とれおち）せし水主馬奴（みづぬまのこ）の駭（おど）き周章（しゅうしやう）で忽（たちまち）地水中（ぢみづなか）へ  
 跳（は）り入りて一瞬（ひとしげ）の間（ま）に取落（とれおち）せし二箇（ふたつ）の荷（か）と水底（みづそこ）より把揚（たてあ）て船（ふね）に積（つ）つ在（あ）り  
 下等（げとう）船端（ふねはし）に立（た）て眼（まなこ）も離（はな）れどその目（め）を視（み）てぞ荷物（にもの）も聊（いささ）の差（さ）ひの多（おほ）く固来（こらい）  
 箇（かん）の中（なか）に黄金（こがね）まで濡（ぬ）れ厭（いと）ふ東西（とうざい）の中（なか）に上包（うへふく）ある菰（こも）筵（しん）の日の中（ひのなか）に  
 乾（か）きぬき其（その）休（やす）ふ做（し）しおたれし。尚（なほ）も夫等（おとら）のゆふりてかる過（あ）の出来（き）れ  
 夫（おと）も他（ほか）も在下等（げとう）の日夜（ひや）成（な）りの怠（おろそ）かるところ。天狗（てんぐ）の業（わざ）もあつて斯（かく）る珍（めづ）事（こと）のあつたやうは先（まづ）にその旨（こゝろ）を宣（のたま）ふ考（かんが）へる事（こと）と異（こと）口同音（ことくどうおん）の  
 言（い）ひけり。當下（たうげ）主人（しゆじん）の橋（はし）六（む）のまゝや暫時（あきま）手紙（てがみ）又（また）も考（かんが）へ居（ゐ）るし。二人（ふたり）  
 點頭（てんとう）その天童（てんどう）も水中（みづなか）へ落（お）せし箇（かん）の二箇（ふたつ）もや。你達（なんぢら）少（すこ）しの見（み）おぼ

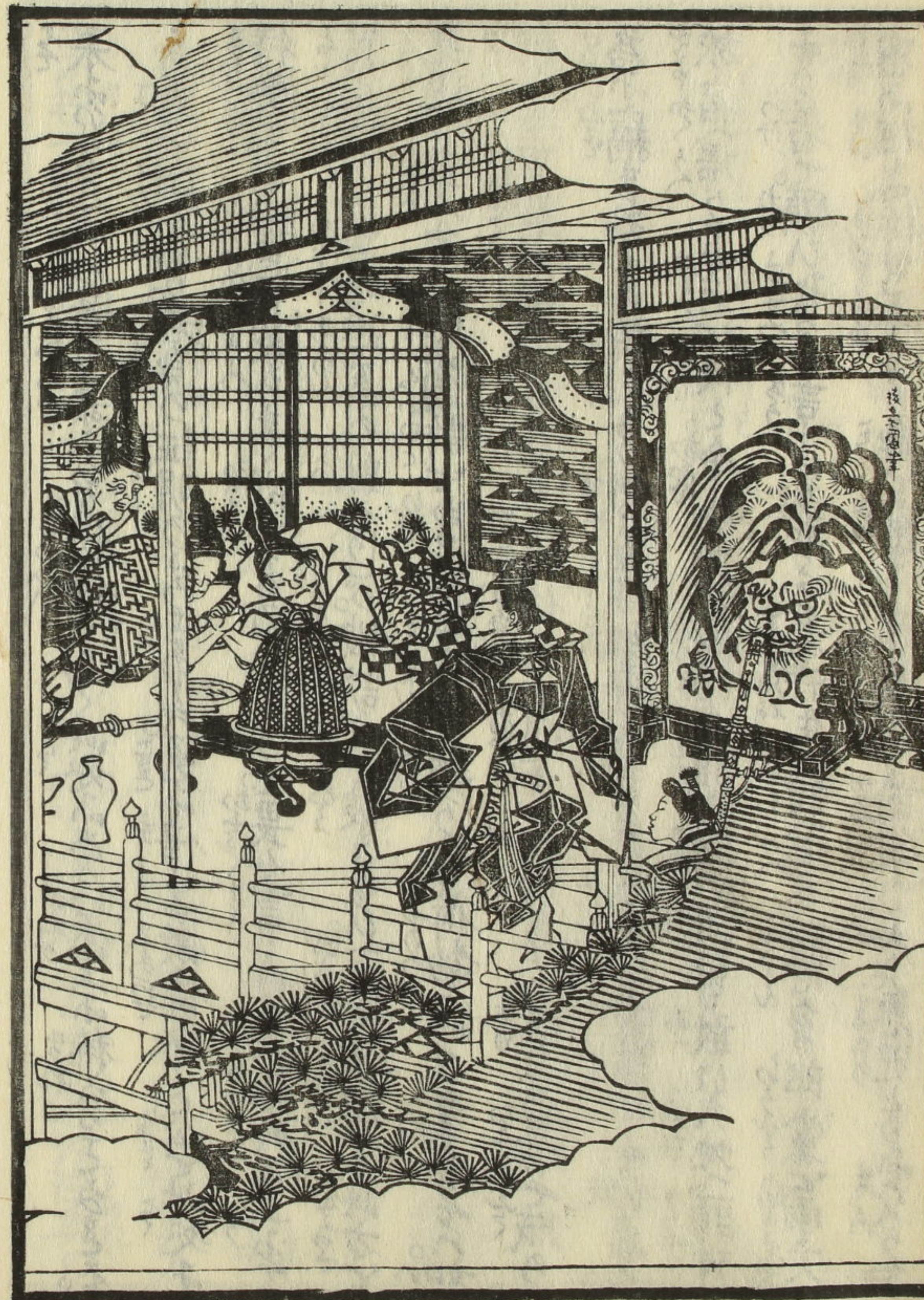
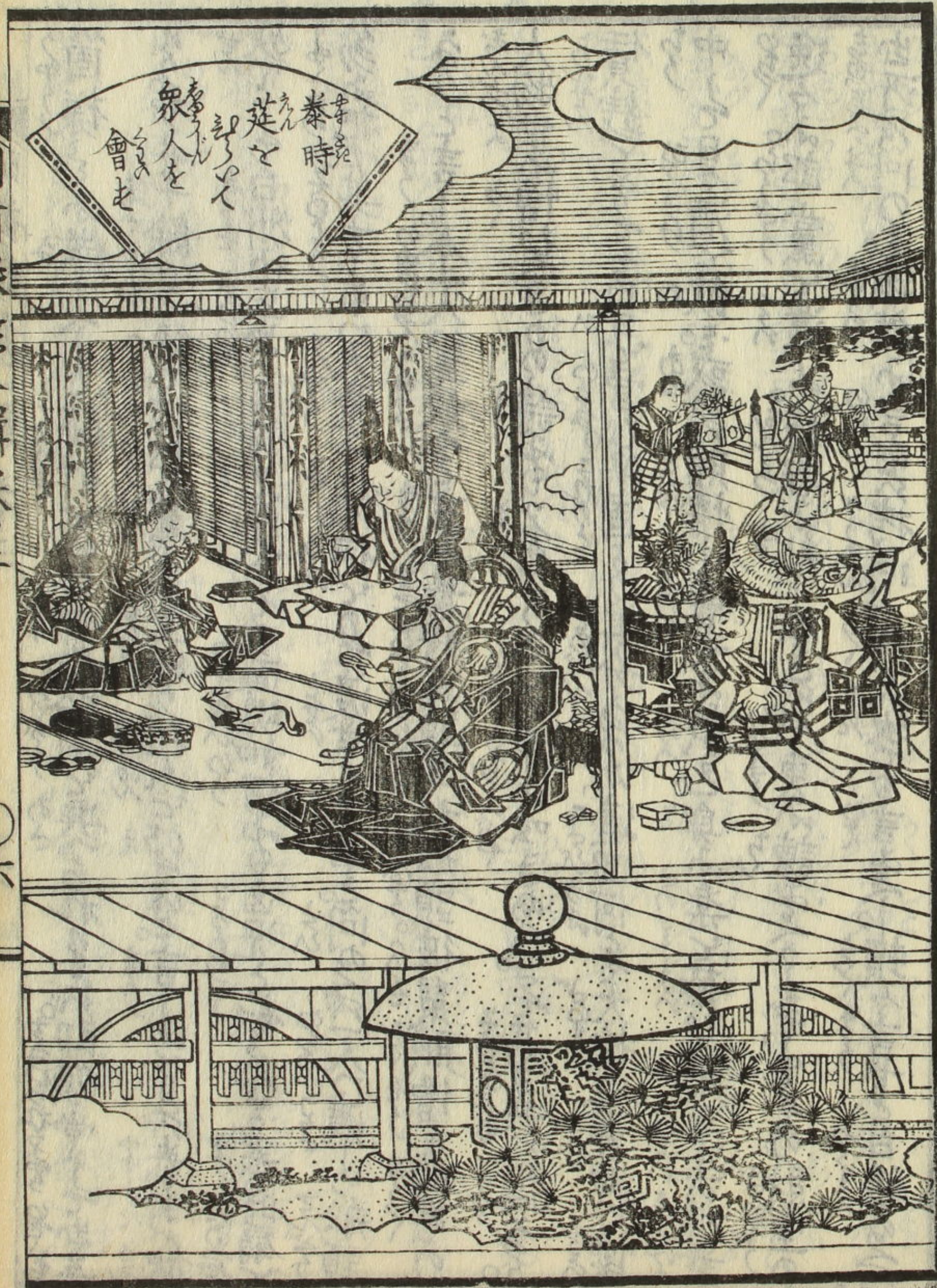
おりやよく視（み）よし。その言葉（ことば）も屬（つ）て下奴等（げにら）を立（た）立（た）奇（き）つ解（と）きし。箇（かん）が  
 らちりし。打返（うちかへ）しを磯（いそ）とみ。拍命（はつめい）するごとく。二箇（ふたつ）に正（ただ）しく水中（みづなか）へ落（お）  
 せし箇（かん）もその證（あかし）拠（よ）と如何（いかん）とまじ。繩（な）の結（むす）り目（め）も悉（ことごと）く。漆（うるし）の着（き）て見え  
 且（かつ）封印（しんげん）も摺（す）てあり。始（はじめ）め聊（いささ）心（こゝろ）着（き）ねど。今（いま）よく視（み）よ。如此（かく）と。この小橋（こはし）  
 六（む）もよみ把揚（たてあ）て。あつちり詠（あ）めて多（おほ）く。去（さ）る。當下（たうげ）に。你達（なんぢら）船端（ふねはし）  
 小居（こゝろ）て眼（まなこ）も離（はな）れし。珠（たま）も一瞬（ひとしげ）の間（ま）に把揚（たてあ）て。元（もと）頼（たの）みの水主馬奴（みづぬまのこ）で  
 も。是（こゝろ）をどう摺（す）換（か）えんや。ゆる飯（い）繩（な）とあつち法（は）ど。人の眼（まなこ）と眩（くら）しの摺（す）換（か）  
 くらと。更（さら）も。証明（あかし）とす。元（もと）懸（か）りあけ。如何（いかん）も詮（せん）方（は）し。生涯（しゆがいの）  
 損失（そんしつ）も。五年（ごねん）十年（じゆねん）持（も）ぐも。元（もと）の鞘（か）へ収（おさ）まじ。と歎（なげ）息（いき）。わん。顔（か）  
 下奴等（げにら）も。是（こゝろ）を証明（あかし）するも。方（は）も。水主馬奴（みづぬまのこ）も。所（ところ）も。有（あ）る。日月（に）

地小墮のほど何となく一渠筆が罪科と紅さこのあふり免れ  
 角まその罪いさ吾々身小罹り言解術ゆり骨を碎き身と粉  
 わしもの罪人と出まへと言葉で竭し化し做し退きし額  
 合せ免せん斯せんと言議の敷刻ふ及べどなご決せばお橋が下奴  
 のうち伴作とのりの青年をた方小怜惻心利ら漢士をねど新参  
 るた小大切ある黄金の荷の宰領も共し都て這回的一件小拘へ  
 らざり才あつても人々の心配り成見ふ忍びませ膝より寄せ新参る  
 身分のて各方の高羨ふ口とせよ鳥辭るねど実小主人の宣ふ如く証明  
 とすごたふあけまばうや今より決断所へ訴へつとも争ふ把場あふとの  
 あらん然れども在下ま細少の愚案あまの一件のて成りて悉く小若ね

あり日多きぞして其罪人と捕へばんと思ふ事如何中と言はば各  
 今術と失ひ口管吐息と吐のそまじ忽地小點頭の知らく如くこれく  
 身小そその大難多る足下一人が引受て日多きを盗人と捕へんと願ふ  
 小稀の傲倖多し此方小聊異存わねばよな討ちあふ。夫小就て入  
 目あふ吾々金囊を拂きてもその間とつ開せど。いふよう伴作  
 の莞尔と笑つ答ふや。殊ふより細少計の八目あふの初ねどもその  
 在下の懐も旅費の遣ひ残りあり各兼若しあふるも小も早く計らん  
 とて頻て旅店を立ちまへ。あつく跡と見送りて這奴小怜惻漢士をねど誘ふ  
 り雲と掴む。いふ等この穿鑿覺束るなふと人々易き心もあたま  
 案ト苦して居らけり。佳而伴作の六波羅の小路をねて彼処此処囁言

きてその便道と。雲時窺ひて在り。折しも北條泰時主南方へゆきてその  
 帰館の供人数多と召供て。動也と通られける。伴作を成視るより。も  
 忽地泰時が馬前小畏。一通の状と右の捧げ。大地へ平伏て居り。近  
 習のよき成視て其方と。何者ぞと声高や。問菟を伴作より頭とわが  
 下儀。與ふる。金向橋六が従者よ。い。這回商の為主人諸俱京登。とい  
 が黄金の荷の内。二箇何。瓦礫と変。下。から不測のあ。を。種々  
 穿鑿して。更。此の懸。東海道。天竜川。を。如此の。あり  
 の。然。當下。宇領。属居。頼小曳揚。と。な。は。懸。言。夫  
 小就。の。荷物。と。宇領。を。吾。越。度。言。解。術。多。命。以。償。り  
 他。詮。方。い。を。然。ふ。公。の。明。察。賢。智。の。鬼。神。と。の。欺。の。と。遠。陸。奥。の

果。の。半。う。童。も。慕。ふ。僥。倖。と。く。此。外。ふ。あ。の。愿。ふ。稀。ある。と。み。を。  
 の。事。と。訴。あ。げ。若。身。の。証。明。の。う。ら。ま。あ。は。は。倍。る。傲。倖。り。と。公。と。此。外。ふ  
 待。受。て。仁。惠。と。蒙。ら。ま。欲。する。の。ふ。い。う。と。畏。々。言。け。は。泰。時。馬。上。を  
 篤。と。関。の。ひ。暫。時。思。案。の。躰。あ。じ。が。彼。訴。文。と。披。き。あ。ひ。一。通。り。見。渡。し。て。此。方。と  
 見。返。り。宣。ふ。や。う。既。小。国。許。と。物。と。主。人。より。預。り。る。荷。物。ふ。か。る。変。あ。つ。て。如  
 何。の。言。解。術。あ。つ。ん。二。件。你。等。が。過。り。の。ひ。あ。つ。成。り。成。台。心。り。之。賊。の  
 為。小。竊。ま。れ。と。格。別。り。何。さ。る。仔。細。あ。り。氣。さ。ま。の。不。目。小。穿。鑿。と。と。は。を。  
 旅。宿。へ。帰。り。と。左。右。と。後。と。命。ふ。と。伴。作。の。額。の。汗。と。拭。ひ。も。敢。は。大。地。へ。頭。伏  
 ま。り。着。て。願。ひ。な。ら。と。言。け。り。か。く。泰。時。生。の。館。へ。歸。り。腹。心。る。郎。黨。と。面。入  
 密。招。き。你。等。今。より。身。と。棄。す。天。竜。川。の。前。後。へ。あ。り。悪。見。と。も。み。父。り。と。







てく証明成るん。さうと鼻あろぬ罪成負て死するその歎ふこと。愁訴  
 ふろそ彼等と憐れ密小人とゆて事実と探るふ汝等數年彼処在て上  
 下の荷と扱ふろ。橋六が黄金の荷の綴り及封印と見覚へ豫て荷物と  
 持へおれ儲その荷物の来る以前水底へ沈めおれ故意と過て荷と把落し  
 荷お沈め置する荷と摺換ふる疑ひは緞令の上種張の辨の左右陳  
 ずるも許さんや。在の隨意々々頓々言せと星と的る奉時か。智慮明晰悪  
 棍等。开詮懐ぬと成覚りの忽地お額着け。現中君の命する通り五号元頼の  
 欲いより此の如く計らひて無数の黄金とほてゆひら。天罰頓お巡り来て今か  
 縛お遣て。則自業自得と。首伏お及びいへ。奉時猶も是と糾て遣ひ  
 金の聚り橋六へ返へ。供へり。ふより。宰領等が証明も立且伴作が

計ひのて頓お事の落居る。その功おましく莫大ありとて真伴作と取あげて支  
 配人おぞ做らる。斯て世も稍穩くあり。奉時聊の閑暇とほて近習扈  
 従等その他お。平生お往く人として集り日未お公務お暇とほて夜とあく日と  
 ろ。心と勞して晴々したるもの。この程に静謐とて心中穩まき。今日一  
 座の宴席と閑さ。詩歌おまじ。基將基おまじ。その令の心お應じ。終日お  
 樂して太平の餘徳お浴せと思ふ。頻て人々と廣間お聚會酒殺と  
 把お。盡や順お巡り。然らば是より銘々の嗜むる事と做して今日の  
 日と暮まじと。夫々の席と分つ。詩哥連俳とて一席とほし。書画とて  
 一席とほし。管弦とて一席とほし。基將基とて一席とほし。或ひは諸藝  
 未熟おして。その席々へ連るるが。別お一席と設けて腕押枕引頸挽

るほどの戯と做す。その情その真席々小因て濃あり。泰時彼方此方  
 うち巡り。その堪能と称し。頓て基将基の席ふまむ。数面の局  
 小對ひて雌雄勝負と争ひ。更ふ他の念と忘る。粵小平三郎左門尉盛綱  
 も。この節上京の折。早天より。早未り。詩歌の席ふ連り。何時の  
 間ふらるの席ふ加り。一人と将基と挑む。泰時。その勝敗と窺ひ  
 小盛綱果敢く輸ふけり。贏る人のひける。凡そ武勇及文辞ふ  
 於て。世ふのそ豪傑と称す。将基。下ふ在り。戯す。笑ふ。盛  
 綱。呵々。うち笑ひ。基将基の巧拙。字びを克する所ふ。吾この道  
 と好むもの。公私小暇ある身。師と需むる。諺。自ら流  
 る。駒の利と知る。と。打笑ふ。泰時。傍へ坐して。

見て盛綱席と避。今日の餐應ふ。量と過して。酩酊の酔。其処此  
 処の席と窺ひ。何台と。稱譽。典る。呵々  
 とうち笑へ。泰時。荒尔と。博技。入敢て。屑と  
 思ひ。今。足下。詞と聽。好む。猶克せば。  
 駒の利道と。實。然らば。将基の聖者。国と。稱し。可る。長。  
 奈何とのふ。戯。世の諺。武王。伐の。初て。造。ま。り  
 と。入。証。と。戦。國の。頃。始。る。人。都。て。駒の。懸  
 引。軍陣と。表。し。の。攻。守の。段。種。々。然。ま。駒の。利道と  
 不能。知。る。輸。る。を。輸。る。道。の。聖。も。稱  
 たり。ま。戯。宜。ふ。是。と。辨。せ。飛。角。金。銀。桂。香。の。利。あ。り。く。當。る。あ。り。と。

或ひは從横一或ひは屈曲と就中飛角の二物の盤上の勇士と其障  
 あれ小於て一端より端へはふりその働き駒馬の及ぶ也然るは歩兵の  
 為小獲らんと桂香の為小陥りしなり是其の利小己まが駒と並て道と  
 塞ぐが故を利と知らる者小ありまその利道と克智時ハ屈伸進退  
 自在にして輸るものありあはるる故小足下駒の利と知らうと言ふ因と  
 將基聖と称へあり然れあはるる名と視返りあり各各の理小屈伏しと実  
 小然るるとて笑ひたり泰時とて藤立直一這は一時の戯言の事と  
 ども天下国家小君するもの準ふもす將基小類をとあり尤を玉將飛角以  
 下数多の家臣と役ぐる銘々の利道ありその得る要察してその役と  
 務めさすむる萬小一失のあはるると思將の要察するもの或ひは角と

のて豎横の役小用ひ或ひ飛とと隅へ往の役小任ト銀とを左右と働らせ  
 桂馬とを直道と勉めさせんとする故小其人功とさる小難く却つそ  
 不虞の禍と曳させ銘々の利道とばらるるを要察使ふもの拙きものその  
 人々の器量と察して用ゆる時の数多の家臣己まが足小第一と憂とす  
 と絶てあはるる泰時とて不才とをあの六波羅小居らるる京幾の政と  
 て任せらるるも喻へ香車小退くは役と命ずる小異なるを功とせ  
 為考り然れども君父の命背くは事ある時の寢食が志  
 らまて小勉むるの因て各の泰時が不肖と佐と私る偏小君のあはるる  
 國家の為と心小忘さび勉て賜ねとありは在合人々形と改め命と  
 及びゆきと歩兵の果敢るるも敵地小入るとさるる君の半臂小佐

ざらんや。心易く思せとて。果に動響音ふらりみたり。

第六回 警者の悪巧并醇醜の教諭

斯て北條泰時ぬの仁政遠近に聞えり。曲まるもの自ら愧て改むる。至るもの。訟獄ゆいと稀めて罪を犯す者鮮く。刑鞭蒲腐て螢空しく飛の穂に代ともあうけり。諸万人の中より。奸計と巧み出り。色と欲とふ身と忘まて。あらまぬ事と為さる。稀々あり。借も一日。廳前へ年の頃二十四五を。その容豪家の子あり。いと清らなる。衣裳着ると年の程三千可り。髪髭茶々として。瘦がまらる。身は單の褐と纏ひ。警者と二人と引居て。訴ありと言。次も泰時頓て。とゆら。その趣と聞ら。二十四五ある雄子。謹そ。恐しく言をせり。

在下の東洞院烏丸の商人と名と精九郎と。ぬらりの所用ありて。三條の大橋の邊と通り。この盲人傍へ来り。些頼と。たのありと。言を。何まあやと。苗且懐より一通の状と。さうゆ。その状と。在所より今届き。豫て所用といひ遣。返辞と。遅くと。た。届き。文の嬉しもの。人の如きの警者も。讀この。扱き。一通り。読。ぬらねと言ま。ど。ふ件の状と。受。扱。封。切。て。読。其。文。其。安。否。と。訊。ひ。さ。て。這。回。言。越。る。用。向。逸。々。諾。ひ。れ。ど。心。小。任。せ。ぬ。金。子。の。り。思。ふ。ま。ま。の。調。兼。漸。々。ふ。り。て。三。兩。と。敷。入。る。取。敢。び。贈。り。遣。ま。る。因。り。受。把。へ。餘。り。重。ね。て。の。便。と。期。て。種。々。言。進。ら。ま。る。の。文。面。微。細。小。読。因。せ。者。彼。状。と。返。し。け。し。盲。人。へ。ふ。捧。げ。茶。一。杯。戴。き。有。難。く。こ。そ。い。

るまど再三回額着て然らばその三両金で供へあはすと云はれぬをゆを不金  
 子にふあはる文面斯のどくまこと金子に他は届き一あはるとのへ警者  
 の不猜顔の書状へ今赤脚屋より受把て来らるるを別へ届き一物も  
 るし。三兩贈る受把と認め在るる金子も俱ふ無て候下。備は在下  
 と盲目と侮り掠りあはる恨りわとのひは袂と諸を爪と喘潤声とあは  
 て人の視みふ似ぬのる。人品といひ衣裳といひ黒心ある人といひも倚  
 らぬらる奉動の尽ふ止らんや誰ぞ替力と佐けて賜べの警者こそとひ  
 掛る光棍ふ遭て難美なれと叫び狂へ三條の了得ふまき人通りと  
 東の間ふ吾々が前後左右へ五人の弥がよ折重あり。近曾衣裳清  
 りふ。人品と剛表ひる。光棍が流行と世の風関を等あてふ非ざるを廢

人の東西と掠むる罪を深きとあり。さど。口々ふ罵るるを五音ゆ  
 あは赤面なり。言解んとされどとの警者。己が勝も大音ふりひ  
 罵りて止ざるのま。立籠人の置々と更ふその是非といふ由あり。元未在  
 下三四両の金子に懐中ふ貯へ持て。服りのとふ辛ト果て既ふ其金子と  
 把らせ難と遁とんをと在せ。然計らへとの警者。偽言却て実言  
 とあり。在下光棍の悪名夫を。さふ於て餘美ある。警者と牽て尊前  
 駭う。ま。実在下。知らざる如との警者。奸計あり。ま。物狂へ  
 る。明く裁断做し。あはしと額着る。奉時始終と果て。こ。盲  
 人と熟者のひ。名盲人その方。何方。住居て名。何との。詳。小言せと  
 あは。警者。いと。諸。在。下。近。江。の。者。を。名。を。梵。論。と。ゆ。び

てい固旅拵の按摩の住所と何方と定りまうと然るも長は着  
 病めて拵了溜りもさ失ひ候る寒天小迎ひても温み着る術ありむ  
 己ま名ふ負ふ梵論一枚今日と凌ぎざらば則在所の近江の兄江方  
 へ金子の之心のひ遣はせし三両の黄金の頼み救ひあつらふまに不運小  
 ちてとの雄子小掠り取りし薄命と憐れあひて速返せしめり  
 厳しき上意と願ひなると言ひたり。泰時情閑の盲人夫相違り  
 まる。ま亦汝幾個の年。瞽目とあつてこの程の聊も視えざるを又少い  
 視ゆるわ包まざり言せと命と関て今言ひし二伍一什一点をりも偽  
 々。瞽者とあつて五六歳の頃あつと母の言ひに在下の此も覚念勿論  
 當時聊も視ると候ひぬと人の當下武刀声とあつてやと梵論一

汝が口誑前後大相違せり。五六歳の節瞽者とあつて今聊も看え  
 る。然るも三條の大橋も精九郎が袂と揪へ人の視ゆる小倚ぬりの  
 る。人品とのひ清りある衣裳と着る候白と。罽り狂ひらうとの入抑  
 微も視えざりて衣裳の清りある候何とぞ知りし。と疑ひのニツありと  
 命も候で梵論一。この公の御意とも覚えぬ眼の見え様も袂と把  
 へ。この心算のその衣裳の精粗の知らまひと言せも果だ泰時ぬ。袂と把へ  
 衣服の知らん。人品の善悪の汝何と揪令知りし。往來引も切ぎる場所を  
 未聞不見の人小往あひ。人品の好悪と看て書状披見と特むふ於るの  
 深き意の底あるべし。ま三両の黄金と封状の夫どの重目あり  
 るとて始め特むるは金子の入らうと彼小信と断らざるも入

汝盲人の夥計ふ入て梵論一をど頗る官名と曾ほしりども眼の必む者  
 ありき。微く視る親族より内用と言越る殊小金子と封を状と往  
 来ゆておぼざる人ふ披見と恃む最訝し。その状あり頼物と命せふ  
 梵論一懐中と探りて把を状一通茶一くさ。おせふ泰時取て打詠り。文  
 躰精九郎のふ同。近江の國多賀の莊百姓草野次郎と汝が兄を  
 ろの草野次郎と呼ぶ。正ま明白なるほど微明のほるとも人並るぬ。  
 罷のよく重りあるは是も不便の所為と。咳きあひ此方と視返り。いふ精  
 九郎の状のいふ金子封とをなむ。ま梵論一より恃ましと重目あ  
 りとい心着む。途中のゆりて吾あるを遣せしもあつるびとの命ふ精  
 九郎頭と低金子の曾ていふ。ま遣まらやうもいふと。謹て回答まうせ。

然ゆこそわづめと点頭ゆひて。精九郎その言の如くあり。汝お過ると  
 りども。一事の無忽あり。汝商人ふその衣裳分ふ過て清りて。い  
 於て量らざる災ひおも罹るとあり。貫之が古今の序も。文屋康秀が評  
 して曰く。言の巧きを其る身負む。商人のよれ衣着さんぐ如くの人然  
 る。往昔より商人のよれ衣着さん身負む。似合くぬのあり。ま  
 汝が無忽あり。寛ふ沈む縁故。因て汝梵論一がの三兩の半とせ。吾ま  
 その半と償ひ。この法師ふ把ま。その実否を定る。ね鰥寡孤獨の  
 他おま。憐れむ。盲人あり。や渠不良うとも人の情ふ。あ。世  
 まがた廢人。と命ま。精九郎公の命ふ。何程。と。辭。ゆ。ん。  
 畏ぬと回答り。泰時此方と視る。と。梵論一。吾格別の仁慈と

のそぢうぬとの人精九郎ふ半かを残り半の吾償之教の如く汝も嘗へん。  
 其その警者と憐まらる。と因て梵論一満面ふ笑み成合ふらち歡び。額  
 つく。数回奉時その間ふ傍る火桶の中へいと太ちある鐵火箸と突  
 入まそあれたる火箸の列火の燒爛まそ火花榮然と飛散る斗り。頓て  
 其は成也。如何ふ梵論一望その金とくまへ。其は成也。受まこと。  
 命ふをのと頭と擡げ。椽の端へも成也。奉時その燒火箸といふ金と  
 と言も果ぞ堂へ措んとす。其は成也。梵論一鐵火ふるち驚き。嗟やとらる。嘗は成  
 也。奉時忽地机と搔やと礮と白眼汝奸賊警者ありとて人ぞ欺き  
 課すとも。争り吾と欺きはん言と巧み心と弛まを。いふ黄金と共えんと。  
 鐵火と成也。嘗は成也。近づぬふ忍まそ忽地曳らる。眼の視えばいと成也。

者共這奴ふ繩うけよと声の下より雜人も畏りさふと回答も果ぞ。  
 右と左ふさうら。失庭ふ梵論一と擡めら。奉時扇と笏ふ把て如何ふ梵  
 論一汝ことまそ。其の奸謀といて幾個と陷まら。その人既ふ外因と憚  
 り。且名の顯つる成也。忍のりら。小金と出ると緋成濟せ。其は成也。金蓋とひら  
 心地の質状數通を拵へ。人物と見え警者と号して欺き貪りらふ  
 相違あはし。頓在のまみ首伏せむ。獄舎ふ聚聚て責問んと。儼然と  
 て宣ふも。梵論一謀計と見透まそ。陳ぢらふも。逸々首伏ふ及び  
 其は成也。精九郎の罪ありとて直ふ宅へ飯まそ。偕梵論一の答杖て京洛中  
 と拂はまら。折ら言一次の漢士ら出て堀川の者のより。年六十可りの  
 老父と三十足むの婦人と兩個訴へまら。緋ありとありらと。言はる如何





計らひまうさんとの入茶時とて視返りて直るこゝに召せとあり言  
 次つぎの漢士かんしを出て件くだまの兩個ふたごと伴とも多おほひつ坪ひらの内うちへ居ゐる。干時かんじ老父らうふを懐なく  
 う一通いつとつうの状じやうと捧たげて。思おもひく縁ゆかりへか。泰時たいじとて紙かみ把とりて口裡くち小読せうとく畢はり  
 机つえの上うへ小閣せうかくまのひ老父らうふの方かたと振ふ向きむき。堀川ほりがわの喜よろこみとてあなたあなた  
 むる女むすめ見み小柴せうさいを訴う告ご文ぶんの容よう紙かみ視しるふ七年しちねん筒つつ小同郷せうどうきやうある。宇八うはち許もとへ嫁よめ  
 せしめらるふ。其項そのこう宇八うはちの困窮こんきやうを。朝夕あさゆふの煙けむりもまよひつる。小柴せうさいが節操せうさう世  
 小稀せうめて良人らうじんと俱とも小貧せう苦く瓜うり凌りやうぎ。明あを油あぶら断たるく挿さ了りやう。漸しだ小貧せう苦く  
 瓜うり忘わるふ。夫おつとより追々おひ々おひ傲おご倖しやうありて。なほの程ほど衣食いじよく住ぢ小縛せうばく閑かんさる  
 ちりみるまう。然しかるふ宇八うはちの始はじめ。貧困ひんこんある瓜うり忘わる果は小柴せうさいが次女じよめの醜みにくい  
 忌いめて。屢しばしば離別りべつと但ただがせども。小柴せうさいの絶たて美引みひきを。是こゝよりて宇八うはちを怒いかり。

在ある種かた々さまざまの詞ことばと屬あつてまう其身そのみに。你あなたが方かた預あけしとて故ゆゑふ人ひとの利り  
 害がいと解とても猶なほ宇八うはち可か入いむ扱ある。愁あはれ訴うのぐん。夫おつと小細せうさい少せう由よし相違さうゐある。別べつ  
 小仔細せうさいしゆのあつとある。包つまむ明あ々あ地ぢ小言せうごん。まよと嚴げん小命せいのちせらる。喜よろこみ小  
 柴せうさいの諸しよる瓜うり着ぢき。争あり偽いつはり妄あや瓜うりまじあふ。勿な論ろん信しんを。とて女むすめ見みが不ふ標ひょう  
 致ちとて言ごども眼め鼻はなの揃そろひ。廢人はいじんうてふゆゑ。訴う告ご文ぶんの言ごを一通いつとつう。筒つつ小  
 宇八うはちの貧ひん苦く小迫せうり。誰たれとて縁ゆかりと組くみののりけし。女むすめ見みが醜みにくき瓜うりの厭いとむ。縁ゆかり  
 閑かん代だい小渾家こんけと做しやうある。小柴せうさいの夫おつとと心こゝろ由よし著ぢる。人ひと並ならむ。醜みにくき生なれ誰たれも  
 渾家こんけ小持人せうぢいんある。生涯しやうゑ寡婦くわふと心こゝろ裡うちへ粗ろ覚かく悟ごして在あり。折せる。宇八うはち  
 小渾家こんけある。一向いひやう小歡くわんび思おもひ。貧ひん苦くと肩かたとのせ。夜よの眼めも寐ねみ。縁ゆかり  
 と繰くり。或あるひ賃ちん針しん線せんふ瓜うり盡じんして。良人らうじんと俱とも小挿さ了りやう。了りやう得とくの貧ひん苦く之し

追著せ。僅五六年のその裡。大う豊けた身とありぬ。因て宇八も驕張  
 生ト。今の眉目より。渾家と迎へ。瞻望と快く。せんとも。小柴も難題と  
 以懸て。罽り辱むると。數回さまで。逆りぞ。此に於て。今更ふ。小柴と去  
 べ術計あり。その裡親く。往々人と。情合のう。成のひ掛て。暫く下僕  
 預けらる。夫より。小柴と責問ふま。絶て。迹形なき。虚言ありと。女兒の言し。  
 宇八も強て。自ら論じ。萬事心も應せ。離別さす。この言し。居り。  
 思ふ。宇八が。不人情腹多し。くゆ。女兒が。日夜歎き。けし。其のゆ。せ。  
 訴へ。あま。何卒君の。賢慮と。の。宇八が。不実と。正し。有難く。こそ。い。氣  
 と。涙と。流し。涕ら。ち。わ。て。震へ。く。言し。ら。奉時。具。お。岡。畢り。や。と。小柴。と。え  
 る。と。其。方。の。幾。箇。ある。な。ま。宇八。が。歳。の。幾。箇。ぞ。一。妾。へ。今年。二十八

歳。宇八。の。三十五。歳。ふ。あり。ぬ。然。と。六。年。頃。相。應。せ。り。近。曾。有。徳。ふ。あり。ふ  
 つ。た。宇八。の。他。の。隠。妻。あり。と。在。と。成。因。ら。や。一。夫。の。一。向。兼。や。け。勿。論。生。得。節  
 儉。を。物。の。費。と。厭。ひ。け。し。然。る。物。入。の。と。一。の。做。さ。と。存。下。け。ら。る。  
 「宇八。の。平生。酒。と。好。む。な。ま。け。你。の。好。を。嫌。ひ。を。一。多。くの。け。し。ゆ。の。ゆ。と。勞  
 ま。一。折。る。と。獨。樂。の。寝。酒。の。け。し。ゆ。の。ゆ。と。妾。の。元。來。嫌。ひ。と。少。し。の。け。し。ゆ  
 け。し。ゆ。の。ゆ。と。親。し。き。人。と。何。者。と。年。齡。幾。箇。ある。と。  
 何方。に。住。居。て。妻。と。も。あり。や。と。五。條。の。四。五。郎。と。と。給。と。高。ぶ。者。に。け。し。ゆ。  
 年。の。大。方。五。十。可。り。妻。も。あり。子。も。三。人。り。四。人。あり。と。兼。つ。ぬ。元。來。良。人。の  
 近。し。き。友。と。常。に。往。り。ひ。ひ。の。良。人。が。苗。守。も。未。る。時。の。更。も。遠。處。と。云  
 と。も。く。足。を。伸。し。て。臥。時。あり。酒。も。酔。て。来。ると。け。し。ゆ。妾。も。對。し。種。々の。戯

ちよるごすたるこのおとど。平生のゆよと誰在て把揚るものゆねど。此  
 程まよとを射の離別よ。その詞もけつる故。彼ふ亡名は負へる。そのおと  
 心憎く。然るど大事のこころまよ。此頃半公遭一折。その由ど呉々らひと。  
 渠は詰りゆべ。半公後よの詞も。他ふ紛らして免斯もうう。そのおと  
 全く証言とて。夢中も覚えのゆべと。因て奉時點頭ゆひ。あつて明日半  
 八と召て。利害と解て。因て。今日まよ。命せふ命々退れ。その  
 日の廳へ果ふら。斯てその次の日。召状とゆて。文注。半八四五郎。喜  
 小柴むく。庭上へ踏まよ。奉時頓て。ちよるひ。その面射一通り。あつて。瞻  
 望ゆひ。ちよる半八と縁近く。召て。其方七十年前以前。小柴と娶り。その  
 頃。貧窮あり。小柴が渾家とまよ。夜の眼も寐を俱拵了。て今

豊けた身とあつて。し渠が訴告文とあり。その通り。小相違。その  
 と同く。半八の畏も。如何の中相違。然るど。下僕が家産。渾  
 家の小柴が働き。後して。豊ふら。鳴謝がまし。渠の女のと。日  
 やる。夜寢の傍。居り。味噌塩の入目と。心と着て。省き。その入用の  
 元と仕。食下僕。身の膏。と半。をせて。奉時ぬ。半八。食ま  
 り。都て世間の家産。善するも。その主人の働き。その汝  
 小限。然るど。渾家。汝何。拵了。その渾家。世の  
 懶惰。家事と脩る術。朝。夕。失ひ。入る。分量。出  
 る。分量。假令。有徳の。忽地。窮鬼。小責。小柴  
 甲斐。万事。質素。其方の家産。大事。脩。を。稍。

豊ある身ともありけり。然る今小柴ふ於てさせる罪咎もあつらふ。
 離別せんとの如何ある譯ぞ尤雄子さるるの忍びざるの義理あると云ふ。
 妻と離別する例君子賢人のうも在り。況て卑俗凡夫と絶する
 事あり。汝が離別謂まる。但夫ある四五郎と密會の疑ひありと
 云ふあり。正しき證據とて言ふは條あり。亦一時の戯言あるを夫等
 も包まざる頻言せよ。命ふ宇八の赤面と。霎時口隠りたる其折る四五
 郎惶々這出。某宇八と積年の怨意と結びゆ。互ふ同胞の如くと
 做一日毎往くひい故ふ卑賤の習俗と。更ふ禮義も尽しや。詞を
 ひも慙懃あつらふ。褻と睦といふも。夫婦喧嘩のその序ふ情合ありし
 と言せし。後ふ兼つりいり。某宇八説爾。詰りいふ渠の誤り。

この一時の戯言とまじしぬ。然れども腹の羨と差ひ世間の口端の
 護影。全く戯言ありと人證據と堪えらと責む。則一通の証文と認め
 てい故今猶懐ふ収めて在と把かして様へけの泰時高し。然もこそあり。
 汝と彼との年さむいさ差ひ然るとあつらふ。思ふも。あつらふ。四五
 郎克因け。假令積年の怨意さうとも。往來ふ禮と兩べらう。況や男
 女の別ふ於て。殊ふ慎む。然る後。怨意ふ任せて禮と失ふ。及ふ。
 濡衣と着せり。論一の四五郎の面の汗と拭ひ。敢て。
 愧て蹲居る。泰時再び宇八ふ對ひ。你小柴と去る。於て言ふ。越
 度あり。遠慮あり。頻り。良人の心ふ。渾家と。生涯配遂
 べん心ふ。恨の故由。固未小柴の標致。人業超て

醜けき女のよ業ふ暗うも常ふ宇八と敬ひて心小逆らふとものけね。  
 家ふ在とたれ漢士の權威ふを理と道理とりの録もまき。今文注の  
 正し受て言ころ程の慮もあ。口隠て返答み。奉時重ねて  
 命するや。吾汝が心と量るふ。渠もひて醜なむ。その身の豊るふ就  
 て。と疎ましく思ひ。去りを再び花香あ。渾家と娶らんとするあ。奉  
 道第一人情ふ於て在るうざるの不実意あ。古語ふ言ま。糟糠の妻  
 堂と下さびと始め貧苦と俱ふ做。後ふ富貴あうる渾家と去らば  
 とこの本文あり。小柴の既ふ糟糠の妻あり。容易去べたのふあ。吾  
 你ふ示まともあり。各も克國べ。凡そ人妻と娶るふ。その容貌の美悪と擇  
 ち。才と心操小拘つるも。是も大なる僻事。美人と愛と家國及び身死亡

そしの和漢ふ。醜女とほて國と治め。無塩女宿痛醜女の類ひ。婦徳  
 小備は争て外見ふ抱さ。故ふ乱王の美女と愛。賢主の才と徳と愛を  
 心得らやと示のふ。宇八頻り額着る。豫て準備やのひけん。近習ふ  
 低語めんと等。銚子盃茶。三方の折敷小載せ。奉時が前へ持あ。奉  
 奉時の亮示と笑。吾教諭の音伏。過改むの五ふ於ても歡び。か入  
 因て宇八の盃遺のま。三方小載り。銀の杯と。宇八下し置る。あ  
 宇八へ更ふその意と解せ。も。推戴け。昔の士も寄り同く  
 銀の銚子とて。宇八酌と。宇八へ頂き。是と喫む。その味ひ苦く。其  
 言語小絶る。悪酒の心裡のま。銚子小似合ぬ酒。と思ひ。飲干ひ。小  
 再他ある土器と把り。這回へ飴色の酒瓶と持て。波々と酌と。做を宇八

是と飲む。池田伊丹の一本生紙屋の菊も及びる。醇酒あて在  
 う。是もまて其蓋と酒瓶小似げる。美酒ありと。折々泰時ね。  
 如何小宇八二杯の酒。你が口への何と云う。好とするやと問ふ。思ふ主  
 器の方こそ遙小倍とていと。言せ。泰時點頭あり。仮令器の銀の造り  
 とも悪き酒。喫する。小伏くも。飴色の酒瓶土器とも。醇酒の尚味佳。の  
 道理と。知る。あつ。渾家の小柴が容貌の美悪と厭ふ。と。心操と。肝  
 要あれ。命せ。小宇八の美伏と。言稟と。言。は。泰時。小柴。對ひ。  
 婦道と。論。あひ。永く。偕老と。契。と。命。ト。各。落。涙。て。感。服  
 ぬ。和順。小暮。り。り。と。の。り。

北條泰時明断録第一輯卷之三終

